

KN グローカルリサーチレポート

2019年12月
No.44



師走となりました。寒さも増してきています。

インフルエンザも例年より流行が早まっています。

厚生労働省によると、2019年第46週(2019年11月11日～11月17日)の定点辺りの報告者数は1.84と、前週の1.03より増加しました。都道府県別では、北海道4.60、鹿児島県3.71、秋田県3.67、長崎県3.63、福岡県3.23、石川県3.04、富山県3.00などとなっています。

表1の浜松市発表の『感染症発生動向調査』によると、第46週の定点辺りの報告者数は2.00となっています。既に、「流行開始」の1.0を超えており、昨年同時期と比べても報告数が多くなっています。

表1 浜松市感染症発生動向調査(インフルエンザ)

	第44週	第45週	第46週
2019年報告数	30	40	56
定点当り	1.07	1.43	2.00
2018年報告数	8	0	3
定点当り	0.29	0.00	0.11

今年は早めに予防接種を受け、うがいや手洗いを心がけましょう。



風疹ワクチン・無料受診券

国立感染症研究所が11月20日に発表した「風疹急増に関する緊急情報」によると、今年も2018年

表2 風疹報告数

単位:年、人

2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019-11
87	378	2,386	14,344	319	163	126	91	2,946	2,263

国立感染症研究所

に近い風疹感染者数が報告されており、2012年から2013年のような大流行の恐れがあると言う。地域では、東京都(845人)、神奈川県(289人)、千葉県(197人)、埼玉県(195人)、大阪府(129人)となっている。報告患者の95%が成人で、男性が女性の3.7倍多い(男1,778人・女485人)。男性全体の60%が30～40代で、女性全体の64%が妊娠出産年齢の20～30代となっている。

風疹はくしゃみや咳で感染し、妊婦がかかると胎児の目や耳や心臓に障害が起きる「先天性風疹症候群 CRS」の患者が生まれる可能性がある。妊婦はワクチン接種できないため、妊娠前の女性や家族の接種が重要である。

1962年4月2日から1979年4月1日生まれの男性は予防接種を受ける機会が無かったため、他の世代に比べ、抗体保有率が低い。厚生労働省では今年度から3年計画で、この世代の男性に、風疹の抗体検査と予防接種の無料クーポン券を送付し、受診を呼びかけている。

この世代の筆者にも「浜松市風しん抗体検査等クーポン券」が届いたため、早速、かかりつけのクリニックに行き抗体検査(採血)をした。1週間ほどでクリニックから電話があり、「測定値が8未満(免疫を保有していない)」とのことで、MRワクチン(麻疹風疹混合ワクチン)を接種した。40代50代の働き盛りの男性は、この機会に、無料クーポンで風疹予防を!



アクティブラーニング ～米国HighScope幼児教育カリキュラム 視察記～ (No.6)

10月からの幼児教育保育の無償化で、保護者が幼稚園や保育園に払う月謝の負担が約2万円前後少なくなった。『我が子に新たな習い事を』と考える親も多いようで、このニーズに応え、例えば「0才児向け英語教室」や、算数・国語・英語を週1回学ぶ「小学校入学準備塾」など、乳幼児向けのサービスが登場している。

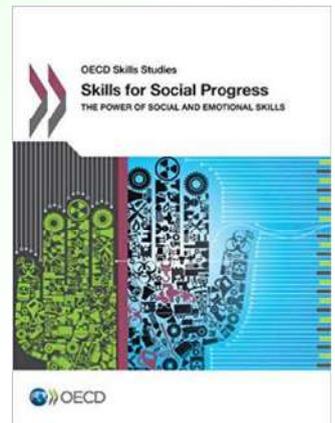
前回(No.5)は、乳幼児の脳の発達について延べ、その特性から「非認知能力(スキル)」と「実行機能」を重視したカリキュラムを提供しているのが、HighScopeであることを紹介した。

【非認知能力(スキル)】

「認知能力」とは算数や読み書きなどテストで計れる能力(いわゆる「学力」)で、「非認知能力」とはそれ以外の能力で、意欲、協調性、自制心、忍耐力、コミュニケーション力など、測定できない個人の特性による能力である。この「非認知能力」が高いと進学や賃金などにプラスの影響を与える事が研究でわかっており、特に、幼少期の非認知能力は小学校入学後の学力(=認知能力)や非認知能力に大きな影響を与えられている。

OECD(経済協力開発機構)の『Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotional Skills (社会的進歩のためのスキル: 社会のおよび情緒的なスキルの力)』の前文で、『今日の子どもたちは、現代社会で成功するためにバランスの取れた認知的、社会的、そして感情のスキルを必要としている。目標を達成し、他者とともに効果的に働き、感情をコントロールする能力は、21世紀社会の課題に対処する上で不可欠である。根気、社交性、自尊心といった社会情緒的スキルの重要性は誰もが認めるところである』とし、本書では、このような非認知能力を、行政や学校や家族が政策プログラムや教育及び子育てなどを通じて高める戦略や方法を論じている。

また、同じくOECDの『Fostering and Measuring Skills, Improving Cognitive and Non Cognitive Skills to Promote Lifetime Success』では、非認知能力に効果のある教育プログラムとして、HighScopeカリキュラムが期待できるとしている。



【実行機能】

「実行機能」とは、目的を定め、それを達成するために自分の持つ思考や感情や行動を、動かしたり、調整したり、抑制したりするプロセスで、実行機能が弱いと、例えば、宿題を始めるのに時間がかかる、物事の優勢順位がつけられない、カバンの中がぐちゃぐちゃなどの問題が起こる。

HighScopeカリキュラムには、自ら考えて計画し、それを実行し、そして振り返る= Plan Do Review が毎日の日課に組み込まれており(子どもたちは、時間割の Planning Time (10分程度)で、これから何をして遊ぶのかを先生や友達に話し、Work Time (50分程度)でその遊びをし、Cleanup Time で片付けをして、Recall Time で自分がどんな遊びをしたか、皆の前で発表する)、乳幼児の脳の発達に合わせて、実行機能を培うことができる。



執筆 = 西川公一郎 : 元浜松市議会議員、防災士
(公社)子どもの発達科学研究所 事務局長
浜松市中区 在住 ko-ichi@24kawa.org